

● 標準① 【標準】

「1」 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

えたいの知れない不吉な塊が私の心を始終おさえつけていた。A焦燥といおうか、嫌悪といおうか——酒を飲んだあとに宿酔があるように、酒を毎日飲んでいと宿酔に相当した時期がやって来る。それが来たのだ。これはちよつといけなかった。結果した肺尖カタルや神経aスライジャクがいけないのではない。また背を焼くような借金などがいけないのではない。いけないのはその（X）だ。以前私を喜ばせたどんな美しい音楽も、どんな美しい詩の一節もbシンボウがならなくなった。蓄音器を聴かせてもらいにわざわざ出かけて行っても、最初の二、三小節で不意に立ち上がってしまいたくなる。何かが私をいたたまらずさせるのだ。それで始終私は街から街をB浮浪し続けていた。

なぜだかその頃私はみすばらしくて美しいものに強くひきつけられたのを覚えている。風景にしても壊れなかった街だとか、その街にしてもよそよそしい表通りよりもどこか親しみのある、汚い洗濯物が干してあったりがらくたが転がしてあったりむさくるしい部屋がのぞいていたりする①裏通りが好きであった。雨や風が蝕んでやがて土に帰ってしまふ、といったような趣のある街で、土塀が崩れていたり家並みがcカラムきかかっていたり——勢いのいいのは植物だけで時とすると吃驚させるような②向日葵があつたりカンナが咲いていたりする。

時々私はそんな路を歩きながら、ふと、そこが京都ではなくて京都から何百里も離れた仙台とか長崎とか——そのような市へ今自分に来ていたのだ——という③錯覚を起こそうと努める。私は、できることなら京都から逃げ出して誰一人知らないような市へ行つてしまいたかった。第一に安静。がらんとした旅館の一室。清浄な布団。匂いのいい蚊帳と糊のよくきいた浴衣。そこで一月ほど何も思わず横になりたい。願わくはここがいつの間にかその市になっているのだった。——錯覚がCようやく成功し始めると私は④それからそれへ想像の絵の具を塗りつけてゆく。なんのことはない、私の錯覚と壊れかかった街との二重写しである。そして私はその中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ。

私はまたあの花火というやつが好きになった。花火そのものはD第二段として、あの安っぽい絵の具で赤や紫や黄や青や、様々の縞模様を持った花火の束、中山寺の星下り、花合戦、枯れすすき。それから⑤鼠花火というのは一つずつ輪になっていて箱にdツめてある。そんなものが変に私の心をE唆った。

それからまた、びいどろという色硝子で鯛や花を打ち出している⑥おはじきが好きになったし、⑦南京玉が好きになった。またそれをなめてみるのが私にとってなんともいえない享樂だったのだ。⑧あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか。私は幼い時よくそれを口に入れては父母にしかられたものだが、その幼時のあまい記憶が大きくなっておちぶれた私にのみがえってくるせいだろうか、全くあの味には幽かな爽やかななんとなく詩美といったような味覚がeタダヨっている。

問1 二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直せ。【知・技】

問2 波線部A～Eのこの文中での意味を、次の各群のA～オからそれぞれ一つ選び、記号で答えよ。【知・技】

A	ア あせり	イ 迷い	ウ 困惑	エ 不安	オ 混乱
B	ア 職が決まらない	イ 将来への不安	ウ さまよう	エ 浮き続ける	オ 容認する
C	ア すぐに	イ せめて	ウ たまたま	エ しだいに	オ どうしても
D	ア 第二段階	イ 第二段落	ウ 最後	エ 見せ場	オ 無意味なもの
E	ア 浮き立たせる	イ 注ぐ	ウ 動揺する	エ 上の空になる	オ 疑う

問3 空欄（X）に入る最も適当な五文字以内の言葉を、本文中より探し、抜き出せ。【知・技】

問4 傍線部①「裏通り」・②「向日葵」・⑤「鼠花火」について次の問いに答えよ。【思・判・表】

- (1) ①、②、⑤にあてはまる「私」にとつての共通項を、本文中より一五字以内で抜き出せ。
(2) それはどのような意味で、私にとつての共通項となりえているのか、説明せよ。

問5 傍線部③「錯覚を起こそうと努める」のはどうしてか、五〇字以内で説明せよ。【思・判・表】

問6 傍線部④「それからそれへ想像の絵の具を塗りつけてゆく」の意味を簡潔に説明せよ。【思・判・表】

問7 傍線部⑥「おはじき」・⑦「南京玉」は、私にとって、どのようなものであるか、説明せよ。【思・判・表】

問8 傍線部⑧「あのびいどろの味ほど幽かな涼しい味があるものか」にみられる表現上の特徴を漢字で答えよ。【知・技】

●標準①【標準】

【解答】〈50点満点〉

- 問1 a ㉦衰弱 b ㉦辛抱 c ㉦傾 d ㉦詰 e ㉦漂〈各2点〉
問2 A ㉦ア B ㉦ウ C ㉦エ D ㉦ア E ㉦ア〈各2点〉
問3 不吉な塊(四字)〈3点〉
問4 (1) ㉦みすばらしくて美しいもの (2) ㉦私にとつては一時的にせよ現実を忘れさせてくれるもの。〈各3点〉
問5 (例) 現実そのものである京都での生活から離脱して、安静の得られる非現実の世界を楽しむことができるから。〈四八字〉〈6点〉
問6 (例) 次から次へと現実から逃れた自由な想像をして楽しむこと。〈5点〉
問7 (例) 幼時への郷愁を誘う幽かな涼しい味のするもの〈6点〉
問8 反語表現〈4点〉

【解説】

問3…私をいたたまらずさせているもの、根本的な悩みを読み取る。問4…(2)「その中に現実の私自身を見失うのを楽しんだ」の部分に注目する。問5…錯覚を起こすどのような利点があるかを設問近辺で押さえる。

● 檸檬②【標準】

「――」次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

以前にはあんなに私をひきつけた画本がどうしたことだろう。一枚一枚に眼をさらし終わって後、さて（Ⅰ）尋常な周囲を見回すときのあの①変にそぐわない気持ち」を、私は以前には好んで味わっていたものであった。……

「あ、そうだそうだ。」その時私は袂の中の檸檬を憶い出した。本の色彩をゴチャゴチャに積みあげて、一度この檸檬で試してみた。」「そうだ。」

私にまた先ほどの軽やかな昂奮が帰ってきた。私は手当たりしだいに積みあげ、また慌ただしく潰し、また慌ただしく築きあげた。新しく引き抜いてつけ加えたり、取り去ったりした。②奇怪な幻想的な城が、その度に赤くなったり青くなったりした。

（Ⅱ）それは出来上がった。そして軽く跳りあがる心を制しながらその城壁の頂に恐る檸檬を据えつけた。そしてそれは上出来だった。

見わたすと、その檸檬の色彩はガチャガチャした色の諧調を（Ⅲ）紡錘形の身体の中へ吸収してしまつて、カーンと冴えかえっていた。私は埃っぽい丸善の中の空気が、その檸檬の周囲だけ変に緊張しているような気がした。私はしばらくそれを眺めていた。

（Ⅳ）③第二のアイデアが起こった。その奇妙なたくらみはむしろ私をぎよつとさせた。

――それをそのままにしておいて私は、何くわぬ顔をして外へ出る。――

私は変にくすぐったい気持ちが出た。「出て行こうかなあ。そうだと出て行こう。」そして私はすたすたと出て行つた。

④変にくすぐったい気持ちが出た。街の上の私を微笑ませた。丸善の棚へ黄金色に輝く恐ろしい爆弾を仕掛けてきた奇怪な悪漢が私で、もう十分後にはあの丸善が美術の棚を中心として大爆発をするのだたらどんなにおもしろいだろう。

私はこの想像を（Ⅴ）追求した。「そうしたらあの気詰まりな⑤丸善もこっぱみじんだらう。」

そして私は活動写真の看板画が奇体な趣で街を彩っている京極を下がつて行つた。

問1 空欄Ⅰ～Ⅴに入る最も適当な言葉を、次のア～カから一つ選び、記号で答えよ。【知・技】

ア ひつそりと イ 熱心に ウ あまりに エ 不意に オ やつと カ きつと

問2 傍線部①「変にそぐわない気持ち」の説明として最も適当なものを、次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。【思・判・表】

ア 一枚一枚語りかけてくる世界の共鳴音のために発生する落ち着きのなさ。

イ 画本の中で繰り広げられた世界から目を去らせ、異常な現実世界に帰還する幸福。

ウ 視点を美の世界から現実の世界に戻すことによって引き起こされる恐怖。

エ それまで美の世界に浸っていた心が、現実に戻ったときの違和感。

オ 現実をそれまで以上に凝視することによって私の心に現れ出てくる焦り。

問3 傍線部②「奇怪な幻想的な城」とは、具体的にどのようなことをさしているのか、説明せよ。【思・判・表】

問4 傍線部③「第二のアイデア」に対して「第二」のアイデアはどのようなことであつたのか説明せよ。【思・判・表】

問5 傍線部④「変にくすぐったい気持ち」が街の上の私を微笑ませた」とあるが、この時の「私」の心情として最も適当なものを、次のア～エから一つ選び、記号で答えよ。【思・判・表】

ア 檸檬の色彩の冴えを思い出し、すがすがしさを感じている。

イ 画本を思う存分見ることができ、幸福を感じている。

ウ いたずらを隠している時の楽しい興奮を感じている。

エ 自らの奇抜なアイデアに恥ずかしさを感じている。

問6 傍線部⑤「丸善もこっぱみじんだらう」とあるが、「丸善」を「こっぱみじん」にすることは、私にとつてどのような意味があつたのか、七〇字以内で説明せよ。【思・判・表】

問7 （1）この作品の作者名を漢字で記せ。【知・技】

（2）この作者の作品を次のア～オから選び、記号で答えよ。【知・技】

ア 浅草紅団 イ 小説神髓 ウ 青年 エ 城のある町にて オ 武蔵野

年 組 番	名前	／ 50
-------------	----	---------

問 1

I

II

III

IV

V

問 2

問
3

問
4

問 5

問
6

[illegible]

問 7 (1) [

$$\begin{bmatrix} \\ \\ \\ \end{bmatrix}^{(2)} \begin{bmatrix} \\ \\ \\ \end{bmatrix}$$

● 檸檬② 【標準】

【解答】(50点満点)

問1 I || ウ II || オ III || ア IV || エ V || イ (各2点)

問2 エ (5点)

問3 (例) さまざまな色彩の絵画の書籍を山のように積み上げたもの (6点)

問4 (例) さまざまな画本を積み上げ、その上に檸檬を据え置くこと。 (6点)

問5 ウ (6点)

問6 (例) 「丸善」は私を圧迫している現実および権威の象徴的存在であり、これを心の中であつても破壊することは精神的に解放され、自由になることを意味した。(七〇字) (12点)

問7 (1) || 梶井基次郎 (3点) (2) || エ (2点)

【解説】

問2…画本の「一枚一枚に眼をさらし終わつて後」、「尋常な周囲を見回すときの」気持ちであることから考える。問4…傍線部より前で、「そうだ」と思いついた内容。問5…「変にくすぐったい気持ち」が「私を微笑させた」と、無生物を主語にした使役表現によつて、愉快な興奮が強調されている。問6…「活動写真の看板画が奇体な趣で街を彩っている京極」は華やかな表通りである。鬱屈からの解放が読み取れる。